

年頭の辞

新年のご挨拶



一般社団法人 軽金属学会
会長 熊井 真次

新年明けましておめでとうございます。本年も会員の皆様のみならずのご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

本学会は、昨年めでたく創立70周年を迎えることができました。本年もICAA18のほか、各支部でも引き続き記念事業が開催されます。多くの皆様のご参加をお願い申し上げます。

さて、昨年11月に刊行された軽金属誌「創立70周年記念特集号」には、軽金属学会にとって貴重な財産となる数多くの記事が掲載されています。この機会にそれらの内のいくつかをご紹介します。私なりの感想を述べるとともに今後軽金属学会が進むべき方向性について考えてみたいと思います。

まず本学会の規模と特徴については、“決して会員数は多くないが、会員の学会に対する思い入れの積分値は他の規模の大きな学会に負けない”、“適度な会員数のために、学側と企業側の研究者の交流もあって、フレンドリーな雰囲気が保たれている”こと等が挙げられています。確かにその通りかと思えます。しかし、大学等における金属系学科や研究室の減少、そして本学会では屋台骨を支える特別維持会員の減少等、憂慮すべき案件も発生しています。よって、本学会としては様々な方面からこれまで以上に会員数増加に向けた努力をしていく必要があります。

“アルミニウムに関しては、講演大会等で極めて質の高い議論ができ、また研究部会においては、軽圧メーカーの手厚いフォローがあり、産学一体となって研究活動を強力に推進できる。しかしチタン、マグネシウムの研究者として本学会に参加する場合は微妙である”とのご指摘もありました。2021年4月の日本チタン学会の設立を、軽金属学会からチタンの研究者が消えてしまうのではと、私はたいへんショックなニュースとして受け止めました。しかし、本件に関しては“日本チタン学会に参画する研究者は、これまで通り軽金属学会をはじめとする他学協会でも成果発表を積極的に行い、連携していくことを切望している”とのメッセージがあり、安堵しています。マグネシウムに係る若手研究者の“これまで検討されてこなかった様々な分野で、マグネシウム合金に興味をもつ多くの人が活発に議論する様子を思いつつ、さらに研究に励んでいきたい”という力強いメッセージも掲載されており、頼もしい限りです。

本学会は軽金属学会と称する以上、アルミニウムのみならずマグネシウム、チタンに係る研究者・技術者にとっても、最も重要な研究発表の場、研究部会活動の場として活用される必要があると考えます。アルミニウムを主体とした研究部会は比較的軽圧メーカーの支援が得やすいように思いますが、今後さらにマグネシウム、チタン関係の研究部会も発展できるよう、メンバー構成や資金の調達方法を含め新たな工夫が必要ではないでしょうか。

“令和の時代を地道な軽金属の研究で生きていくには、キラリと光る研究を突き詰めなければならない。萌芽期に近い新技術や斬新な発想を学会から探し出し、育み、顕彰し、軽金属学会の様々な研究・教育活性化の仕組みに乗せることが必要である”との提言がありました。さらに、“これからの軽金属学会では、従来の材料技術の延長線上の開発ばかりでなく、時代の進展に伴う新しい分野の取り込みを積極的に進め、新しい材料技術分野の開拓が重要である”、“色々な研究を受け入れる懐の広さと深さが軽金属学会の特徴であり、これが学会の発展のカギになると確信する”、“軽金属の上流から下流まで関連する研究・技術のすべてを一つの土俵に集めることが、名実ともに軽金属のオンリーワンになる条件である”等の提言は、本学会の将来を考える上でとても参考になります。

最後になりますが、特別寄稿では、“熊井会長が就任の挨拶で記した、従来軽金属学会の強みだと考えられてきた「世界でも稀有な軽金属に特化した学会」であること「産と学が半々のバランスのとれた学会」であることが、これからも果たして強みとして活かされるのか、あらためて考えてみる必要があるのでは？という問題提起は、軽金属学会が発展していくためなら変化をためらってはならないというメッセージであると受け止めている。岡本前会長が発した「幸せを創る」というキーワードと本問題提起に共通して見て取れるのは、軽金属学会の価値をもっと高めていこうというポジティブな取り組み姿勢であり、80周年、90周年、さらに100周年へと持続的に発展していくことを願う者として現状を頼もしく感じている“という、たいへん有難い応援の言葉も頂戴することができました。

いただいた言葉を糧にして、会員の皆様とともに本年も軽金属の学術・技術の進歩・発展ならびに軽金属学会のため尽力する所存です。どうぞ、よろしく願い申し上げます。